

ヴィジョンなき国家のアニメ

——大友克洋作 *Akira* ——

藤 森 かよこ

はじめに

本報告は、アニメ分析や解釈の発表ではありません。「研究発表」ですらありません。本報告は、韓国のみなさんへの、アニメを利用した私からの「問いかけ」です。このセミナーにおいて、こういう類の報告は異例かもしれません。しかし、あえてそうさせていただきます。

アニメ (Anime) という単語はすでに「日本製アニメーション・フィルム」という意味で英語の語彙に含まれておりますが、ここでは単なるアニメーション・フィルムの略です。本報告において、日本アニメの代表作であり、欧米における日本アニメ・ブームの発火点ともなった大友克洋(おおとも・かつひろ)作の *Akira* (1988) を取り上げるのは、なぜかと申しますと、21世紀になって見直した *Akira* が、自らのヴィジョンを持たない国家、言い換えれば national identity を持たない国に生きる人間の生き方を私に考えさせたから、なのです。その国とは、日本のことです。

アニメ *Akira* に触発されて私が考えたことは、部分的には、韓国のみなさんにとっても、他人事ではないかもしれません。この作品をご覧になっていない方も多いと思いますので、アニメ *Akira* の物語の要約を以下に記しておきます。上映時間124分の作品ですので、プロットも複雑ですから、要約の分量もいささか長くなっております。

Akira の物語内容要旨

Akira の時代設定は、1988年の7月に第三次世界大戦がおきて東京が壊滅してから31年が経過した西暦2019年である。かつての東京は旧市街と呼ばれている。東京湾の埋立地に超高層ビルが林立する街が建設され、それは「ネオ東京」と呼ばれている。廃墟の旧市街地には巨大なクレーターがあり、それは第三次世界大戦のときに受けたミサイル攻撃の痕跡である。そこにオリンピック会場が建設されつつある。

しかし、1988年に起きたのは、ほんとうは「第三次世界大戦」ではなかった。政府は、突然変異の超能力者 (mutant) たちを軍事利用するための研究所を秘密に持っていた。この研

究所が発見し研究調査していた「アキラ」という名前の10歳の少年の超能力が、重なる実験や投擲により、巨大になりすぎて危険になったので、軍が「アキラ」をミサイル攻撃した出来事が、「第三次世界大戦」だった。政府の失策によって起きた惨事を、政府は「第三次世界大戦」だと国民に伝えて隠蔽した。攻撃されて死亡したアキラは、脳髓や脊髄など、各器官に徹底的に分解され、それぞれ試験管に入れられて、鋼鉄のカプセルに封じられた。アキラが封じられた場所こそが、旧市街のオリンピック会場建設工事現場の地下だった。

政府の超能力研究所は、ネオ東京においても、軍の支配と監視のもと、ミュータント発掘や実験に従事し続けている。「アキラ」と同時期に研究所に発見され、実験体となったキヨコとマサルとタケシは、実年齢は40歳ほどだが、超能力調査の薬品投与とおびただしい実験のために、子どもの背丈のまま老化した状態に変異している。

政府の最高幹部会のメンバーである敷島大佐の言葉を借りれば、今や、ネオ東京は、「東京崩壊直後の復興の夢や努力を忘れて、人々がつまらぬ欲望に走っている」状態である。敷島大佐は、制御不能な超能力者を二度と実験で生み出さないように科学者に警告する。ネオ東京では、反政府分子のテロ活動や、機動隊と反政府運動活動家の学生たちとの衝突による暴力騒動が絶えない。この反政府分子の影の支援者が、同じく、最高幹部会のメンバー根津である。根津は、国家最高機密の「アキラ」のことや、最高幹部会や警察や軍の決定事項を反政府分子に漏洩し、ネオ東京の暴力闘争の増加に加担している。根津は、「アキラ」を再現させ、もう一度大破壊を起こさせて、その混乱に乗じて、自分が政府の実権を握るつもりである。

ネオ東京には、「アキラ」を救世主として崇める新興宗教も生まれている。根津の言葉を借りれば、ネオ東京は「熟れすぎた果実」の状態だ。落ちるか腐るかを待つだけの飽和状態である。ネオ東京には、再度の破滅を待ち望むかのような不穏な空気が漂っている。

物語の中心になるのは、島鉄雄（15歳）と金田正太郎（16歳）という全寮制の職業訓練学校生である。ふたりとも孤児で、同じ養護施設で育った。ネオ東京をモーターバイクで走り回る暴走族仲間でもある。鉄雄は、別の暴走族グループとの抗争中に、顔や肉体は老化しているのに明らかに子どもに見える奇妙な少年に衝突しそうになるが、その寸前に、鉄雄のバイクははじかれ、鉄雄は大怪我をする。軍隊がやってきて、奇妙な子どもと鉄雄は、政府の秘密の超能力研究所に運び込まれる。奇妙な少年とは、超能力研究所から、「アキラ」再現をもくろむ反政府分子によって超能力研究所から脱出したタカシだった。

鉄雄は、医療検査を受けるうちに、ミュータントであることが判明する。鉄雄は、さまざまに投擲され、実験体にされる。そのために鉄雄の中に眠っていた超能力は急速に覚醒された。研究所に収容されている同じくミュータントのキヨコやマサルやタカシは、鉄雄を攻撃する。鉄雄が、自分の力を制御できずに、破壊と混乱を引き起こすだけであることが、未来予知能力のあるキヨコにはわかる。キヨコの予知どおりに、自分の力に気づいた鉄雄は破壊を繰り返し、軍と衝突し、ネオ東京を混乱させる。

親から遺棄され、養護施設でも虐められ、そのたびに友人の金田に助けられるという子ども時代を送ってきたので、鉄雄は「強さ」や「力」を、内心は渴望していた。劣等感に苦しんできた。だから、長年の鬱屈を晴らすべく鉄雄は自分の力に陶醉し力を乱用する。時折、鉄雄の脳にある見知らぬ少年の像が浮かび激痛が襲う。キョウコやマサルやタカシが鉄雄より強いと断言する、その「アキラ」と呼ばれる存在と対決するために、鉄雄はアキラがいるとキョコが教えたオリンピック会場建設工事現場に向かう。

アキラの惨劇を繰り返さないために、ネオ東京の繁栄を守るために、敷島大佐は鉄雄攻撃に対する許可を政府の最高幹部会に求めるが、他のメンバーたちは事の重大さが認識できない。敷島大佐はクーデターを起こし、実権を掌握して、鉄雄を攻撃する。攻撃を受けて負傷した鉄雄は、自分自身を制御できなくなり、グロテスクな変身を繰り返す。ついには自らの意思に反して、恋人のカオリを殺し、敷島大佐や親友の金田をも殺しそうになる。キョウコやマサルやタカシは、超能力を結集して、死んで久しいアキラを蘇らせる。再現したアキラは、鉄雄の巨大なエネルギーを別の次元の世界に導く。鉄雄の肉体は、素粒子となって宇宙に拡散し、ついには別の宇宙を形成し、「世界」となる。人間であった鉄雄は消滅する。

ほんの数分ではありますが、*Akira* の一部をご覧くださいます（DVD鑑賞）。

Akira と1980年代の日本

2007年の視点から見ると、このアニメに横溢する祝祭的乱痴気騒ぎのムードは、1980年代の日本の高揚を反映しています。Japan as Number One とは、日本研究者の Ezra Vogel が1979年に発表した本の題名ですが、そのような本が出版されるほど、70年代から80年代の日本の経済的台頭は著しいものでした。第二次世界大戦敗北以来、初めて多くの日本人が、「アメリカなんて、大したことはない」という気分をひたった時代でもありました。

2007年現在からアニメ *Akira* を見ると、鉄雄の「弱者」から「強者」への変容は、敗戦国から経済大国へという第二次大戦の日本の変容と重なって見えます。この印象は私だけのものではありません。日本文学研究者であり、かつ卓越した日本アニメ研究者でもある Susan J. Napier は、*Akira* が、1980年代の日本の経済的成功状況を遂げた時期に製作されていることに注目しています (Napier, 40)。

「強くなって、制約を受けずに行動し、かつて自分を苛めた人間や世間に、その力を誇示すること」という、鉄雄の変容のような題材は、思春期の人間が持ちやすい欲望のひとつですから、この題材そのものは大衆娯楽作品には珍しくありません。私が問題にしたいのは、この鉄雄のありようが、第二次世界大戦の敗北から経済大国への台頭という日本の戦後史と重なるばかりでなく、明治以降の日本のありようとも重なって見えるということなのです。はっきり言えば、*Akira* における鉄雄の変容は、日本の歴史のありようと重なって見えるということなのです。

先に少し言及された Napier は、気の弱い鉄雄が力を得て怪物になってゆくことについて、「この時代の日本自身の深く根付いた矛盾した心性、つまり新しい自分を見出して喜びつつも、一方では、その状態を怖れるという心性の反映としてイデオロギカルな観点から読み解くことが可能である」(Tetsuo's monstrousness can thus be coded in ideological terms as a reflection of Japan's own deep-seated ambivalence at this time, partly glorying in its new identity but also partly fearing it.)と述べています(Napier, 40)。この Napier の指摘は、見逃せません。なぜならば、アメリカ人の Napier の目には、日本が1980年代の経済的成功を喜びつつも、怖れていると見えていたということです。これは、日本が、「強くなっても、その強さを使いこなせない少年」のように、外国からは見えていたということです。日本が、「何の目的もなく、たまたま偶然に力を得てしまって、どうしたらいいかわからないような少年」のようだったということです。

アニメの *Akira* の中で敷島大佐が言う「復興の夢や努力を忘れてくだらない欲望に人々が走っている」ネオ東京のありようや、根津の言う「熟れすぎた果実」のような、あとは落ちるか腐るのを待つばかりかのようなネオ東京の危なっかしさも、経済的成功を手にしたものの、それを建設的な方向に使わぬままにいた1980年代の日本と重なるのかもしれない。

日本の自己欺瞞と、その起源

ところで、長く夢見てきたような状態になったのに、その新しい自分であることを怖れるという心性の要因は何でしょうか。成功したのにもかかわらず、その成功を怖れる場合、背後にどんな理由が考えられるでしょうか。その成功の過程に不正なものが介在していたという罪の意識があるからでしょうか。もしくは、その成功がつかの間のものであろうという悲観的な予感があるからでしょうか。その成功はほんとうに自分が欲望していたものではないからでしょうか。成功してから何をするのか、何のヴィジョンもなかったので、成功しても、次の目標が見つからずに空虚であるからでしょうか。それとも、これらすべてが理由でしょうか。

いずれにしても、夢が実現したのに、その状態を怖れるという姿勢の根底には、自己把握の失敗があります。自分が何ものであるかについて、自分が何をしたいのかについて誤解していて、誤解したまま、何事かを成就したものの、それはほんとうに自分が望んでいたことではないので、充実感がなく、空虚さがあり、次のステップが踏めないという状態に陥るという状態の最初にあるのは、自己欺瞞です。

ここで、個人を対象にした精神分析を、歴史や国家にもあてはめて歴史解読を試みる日本の心理学者の岸田秀の見解が参考になります。岸田は、日本という国が、歴史を通じて、「国際化と非国際化(言い換えれば鎖国)との葛藤に引き裂かれ、揺れ続けている」(岸田, 103)と指摘しました。「実際には、文化的、政治的、経済的、軍事的に諸外国に依存していたり、または諸外国と深い関係があったりするにもかかわらず、諸外国との関係から幻想的

に逃亡し、諸外国の影響を幻想的に否認して独立自尊の幻想に閉じこもろうとする傾向」(岸田, 104) が日本にはあると、岸田は言うのです。

自己の独自性や独立性に非現実的に固執することは、個人でも国家でも、よくありがちなことだと思われませんが、外部との関係に対する日本が抱く不安というのは、日本に特徴的なものであるらしく、岸田と似た指摘を映画研究者の Marie Morimoto もしています。Morimoto は、「日本の文化的自己表象における主要なテーマは、あらゆる不如意に抵抗し戦う孤独な国家の国民というものであり、その国民は、他の国の国民とは違って独特で、だからこそ孤独で、犠牲者になりやすいというものである」(“Dominant themes in Japanese cultural self-representation have long been those of uniqueness, isolation, and victimization—hence of a lone nation struggling against all odds.”) と述べています (Morimoto, 22)。つまり、日本人は、日本は他のどの国とも違って特別だけれども、その独自性ゆえに孤独であり、諸外国とのつきあいでは被害者になりやすい可哀相な国だと思っていると、Morimoto は言うのです。

なぜ、日本人は、自らの独自性にかくもこだわり、その独自性が外国との交渉によって侵されることを被害妄想的に恐れ、さらにその自分のこだわりや被害意識に無自覚なのでしょう。客観的には国際関係に不器用で、ほんとうのところは外国とつきあいたくないのに、それを意識せずに、熱心に「国際化」を追及しようとする日本の自己欺瞞の源は何でしょうか。

それは日本建国にまつわる事実の隠蔽にさかのぼるといふ仮説を、岸田は提示しています。岸田の推理は、こうです。七世紀に大陸に唐が出現して、唐と新羅の連合軍に滅ぼされた百済の出先機関、もしくは植民地であったのが日本列島であり、百済から逃亡してきた人々もまじえて、日本列島に割拠していた豪族たちが、唐と新羅から侵略される危機感からまとまり、日本国というものを立ち上げ、唐の皇帝の真似をして、まとめ役として「天皇」を据えた。しかし、その人々は、大陸や半島への従属関係を否認し、国際関係から逃亡し、列島の中で独自に成立した国が日本だと言い張り、天孫降臨説のような神話をでっちあげた。

中国史研究の泰斗(たいと)である岡田英弘(おかだ・ひでひろ)も、日本に交易にやって来た華僑が、中国や半島の戦乱によって、大陸に帰ることができずに、やむなく日本という国を立ち上げたという説を述べています。日本人とは一種の中国人であり、日本人という別個の民族は存在しなかったし、日本という国があったわけではないと述べています。ですから、日本は百済からの逃亡者によって成立した国家であるという仮説も、いちがいに荒唐無稽とは言えないかもしれません。

現在にいたるまで、日本が国際化と非国際化(鎖国)に引き裂かれつつ、その自己分裂状態に無自覚であることの根本原因は、日本という国が、外圧と脅威によってやむなく建国されたのに、その外圧と脅威を否認して、外国への根深い恐怖を抑圧して、自国の独自性を捏造し、かつ捏造したこと自体をも否認して、心理の奥深くで事実を抑圧したので、外国が嫌いにも関わらず、外国との交通が好きなような行動を熱心にとるが、どうしてもほんとうは

外国が嫌いだから、外国との軋轢を心ならずも起こしてしまうのだ、という岸田の説は、私には、非常に説得力が感じられます。

岸田は、「日本は外国の植民地になったことはない」という日本人がよく言う説を否定します。日本は1853年のアメリカのペリー提督による軍艦外交により開国を迫られ、1854年に、アメリカに治外法権を認めるような不平等条約である日米和親条約を結んでからは、ヨーロッパ諸外国と同じような不平等条約を結び、その状態は1911年まで続きましたが、実質的には、この58年間は日本は西洋列強の植民地だったと、岸田は言います（岸田、128-132）。独立国としての主権を何らかのかたちで侵害されている状態にある国を植民地と呼ぶとするのならば、確かに、日本は、1854年から1911年まで、明らかに植民地だったし、アメリカの軍事基地が日本国内にずっと存在する第二次世界大戦後の日本は、ずっとアメリカの植民地なのでしょう。

岸田は、さらに言います。自分の国が植民地にされたのにも関わらず、その事実を否認して、自己の独自性という幻想に固執し、かつそのことに無自覚であったものの、心の奥底では欧米に対していただいていた憎悪が噴出した結果が、第二次世界大戦だったと。アジアへの侵略は、アメリカや西洋列強にされたことの鬱憤晴らしであったと。ドラキュラにかまれた人間がドラキュラになるようなものですね。アメリカを始めとした西洋への恨みと、自己の傷ついた独自性、自立性の回復のために、日本は現実的な国力水準から見れば、できるはずがない日中戦争や第二次世界大戦を起こしました。そのために、日本人を除いたアジア人だけでも1000万人、日本人300万人の犠牲者が出ました。どんなに屈辱的であろうと、自分の国が植民地であることを直視していれば、植民地のように扱われる現実を直視していれば、少なくとも、日中戦争や第二次世界大戦が、あのようにガラガラと長引くことはなかったはずです。それも、これも、日本の建国にまつわるトラウマから生じているが、そのことが、現在にいたっても、日本の問題なのだと、岸田は言うのです。

独立国家としての日本という認識が事実誤認であることについては、副島隆彦(そえじま・たかひこ)も指摘しています。このような見方は、岸田や副島の被害妄想のせいとは言えません。なぜならば、アメリカの歴史学者の Carroll Quigley が、「日本文明というのは、キリストが生まれた時代あたりに始まり、1600年以降の江戸時代に頂点を極め、1853年以後は、西洋の侵略者によって完璧に粉砕されたと言えるかもしれない」(“Japanese Civilization, which began about the time of Christ, culminated in the Tokugawa Empire after 1600, and may have been completely disrupted by invaders from Western Civilization in the century following 1853.”) (Quigley, 6) と述べているからです。西洋の歴史学者が、日本を侵略して、日本文明を消滅させたと、認めているのです。エール大学で前アメリカ大統領ビル・クリントンを教えた歴史学者が、現在の日本は、西洋によって文明が抹殺された国だと、暗に言っているのです。そのような国が独立国家でしょうか。独立国家日本という認識が事実誤認であることは、どうやら、客観的事実なのです。

選 択 と 構 築

まとめに入りたいと思います。私は、本報告で、アニメ *Akira* に描かれた鉄雄の変容と自己制御不能の状況と、ネオ東京の空虚な繁栄と、その危なっかしさが、経済的成功を獲得しながらも、その成功をどう生かしてゆくかに関するヴィジョンを持たなかった1980年代の日本の状況と重なると言いました。その日本のヴィジョン不在の原因は、日本の自己把握の失敗だと言いました。言い換えれば、それは、日本に真の national identity がいないからだと言いました。その原因は、岸田秀をはじめとする他の研究者の説によって、推測されました。

これらによって、明らかになったことは、以下のとおりです。個人と同じく、国家もまた、自己が何ものであるかに関して確信が持てないと、自己の独自性や独立性に非現実的に固執しがちになり、他者との現実的対処に失敗すること。その問題に関しては、自分が意識していれば、何らかの対策のたてようもあるが、自分が意識していないのならば、その問題はずっと強迫的に反復されること。その例は、日本の起源に端を発した、国際化と非国際化（鎖国）の間を揺れ動く日本の歴史であること。このような状況に陥る個人の人生は危険なものになりやすいですが、同じく、国家がそのような状況に陥ることによって生じる危険と悲惨さと「はた迷惑」は、日本の近代から現代にかけての戦争の歴史が事例であること、などです。

みなさんは、私が何を指摘したいのか、すでに予想しておられるのではないのでしょうか。日本の現在の問題は、自分の国をどんな国にするのかに関する構想を持たない、ということです。ヴィジョンを生み出す源泉である「国のありかた」に対する国民的合意、すなわち national identity がないということです。その原因は、とにかくにも、日本がアメリカの植民地であること、甘く見てもアメリカの属国であることを、日本人が直視していないことにあるのです。もし、直視していれば、それに対する対処を考えます。選択を始めます。その選択が、国のありようを決めて構築していきます。

たとえば、アメリカの属国もしくは植民地として、徹底的にアメリカのシステムを真似るのか、もしくは、アメリカに対して確信犯的に面従腹背で対処し、アメリカの衰退を粘り強く待つのか、もしくは、独立国家として主権を回復するのか、もしくは状況に任せて漂流するのか。選択によって、実践すべき政策が違ってきます。また、選択にはリスクが不可避ですが、どんなリスクかは、選択された道によって違います。

私は、アメリカ文学やアメリカ文化の教師ですが、英語の教師でもありますので、文部科学省や日本の学校が、英語教育の充実や国際化を唱えるくせに、本気で英語教育をする気がないことを、よく知っています。日本の大学においては、英語を学生に習得させるつもりであるのならば、とうてい考えられないような教育環境で、英語科目は開講されています。また、本気で英語を習得させるかわりに失うものの大きさの認識もされておりません。これは英語教育ではなくて、「英語教育ごっこ」でしかありません。つまり、日本は、国際化も国

民の英語力増進も、本気で望んではいないのです。岸田秀が指摘するように、日本は、国際的なフリはしていますが、ほんとうは鎖国をしたいのです。日本のなかに引きこもっていたいのです。いや、真理的には、鎖国をして引きこもっているのです。すでにして、いつも、昔から。

私は、鎖国や引きこもりを非難しているわけではありません。それが日本国民の総意ならば、それを国策にしていいのです。鎖国や引きこもりのもたらす不利益がいかに大きなものだろうと、それが主体的に選択されたものであるのなら、それも国家のありかたのひとつだと思います。しかし、日本は鎖国を選ぶわけでもありません。

ならば、日本は、アメリカに対して確信犯的に面従腹背で対処し、アメリカの衰退を粘り強く待つことを選んでいるのでしょうか。そのわりには、アメリカ帝国崩壊と、崩壊以後の状況に対する対策を考え実践しているようには見えません。

となると、今の日本は、進むべき道を選択しないことを選んで漂流することを選んでいるのでしょうか。それが日本の選択ならば、マスコミが政府批判を展開するのは時間とエネルギーの無駄です。選択しないことを選択したのなら、現状はアメリカの植民地である日本の政府は傀儡政府でしかないのですから、日本の国政にせよ外交にせよ、日本政府に決定権はないのですから、政府批判など無意味です。選択せずに状況によって流されていくということ、すなわち、現実からの逃避を国民が選んだのなら、それも国家のありようです。ただし、そのリスクは、引き受けるしかありません。そのリスクとは、国に対する誇りの喪失と自己確信の低下からくる国民の活力の低下と国力の衰退です。現実の中に足場を構築しない生き方は、個人にせよ、国にせよ、退廃と迷妄に陥るしかありません。それも国民が選んだのなら、いたしかたありません。人間には愚劣でいる自由もあります。

今は、グローバリゼーションが推進される時代ですから、私のように、国家、nation state について、いろいろ述べるのは、時代錯誤、時代遅れであるのかもしれませんが。すでに、国民とか国民国家ではなく、個人や、国家より所属帰属が自由な統治共同体のネットワークが国際社会のリアル・プレイヤーになりつつある時代であるかもしれません。私自身は個人主義者ですから、日本と運命をともにする気はないのですが、現実的には私は国家のありようから影響を受けないほどに強い個人ではありませんので、日本のありようと、その未来に切実な関心を持たざるをえないのです。

ともあれ、どんな時代にせよ、どんな国際環境にせよ、問題は、自分が何かを選んでいるということの自覚です。自己把握です。事実認識です。自分が選んだことの結果を引き受けることです。人間も社会も発生しっぱなしで存続できるわけではありません。たえまなく選択を重ねて、自らの生を構築しています。その構築という作業そのものが生きることです。そこから逃避することはできません。

アニメ *Akira* から触発されて私が考えたこととは、以上のことなのですが、最後に、韓国のみなさんに、ひとつ質問をさせていただいて、この報告を終わらせていただきます。

韓国は、隣国中国の属国である歴史が長く、やはり独立性に不安を感じやすい立場でした。近代以降は、日本やアメリカの支配を受けて、外交の歴史は苦難に満ちたものでした。現在の状況は、アメリカ帝国の影のもとにあります。中国の脅威は、実に身近な地理的環境にあります。私の認識が間違っていなければ、韓国と日本は、その攻撃を受けやすいこと (vulnerability) において似ています。ならば、韓国は、私が日本に関して述べてきたような問題と、本質的には似ている問題を持っているのでしょうか？ 個人間の関係と同じく、国際理解や外交は、まずは自己把握から始まります。互いに、自己把握から始めようではありませんか。ご静聴をありがとうございました。

参 考 文 献

- Morimoto, Marie. "The 'Peace Divides' in Japanese Cinema: Metaphors of a Demilitarized Nation" In *Colonialism and Nationalism in Asian Cinema* Edited by Wimal Dissanayake. Bloomington: Indiana University Press, 1994.
- Napier, Susan J. *ANIME: from Akira to Princess Mononoke* New York: Palgrave, 2001.
- Quigley, Carroll. *Tragedy and Hope: A History of the World in Our Time*. New York: Macmillan, 1966.
- 岡田英弘『日本史の誕生——千三百年前の外圧が日本を作った』弓立社, 1994年
- 岸田秀『官僚病の起源』新書館 1997年
- 副島隆彦『属国・日本論』五月書房, 1997年